

大越和郎さんの被爆証言

広島への来訪を歓迎します。そして、日本と世界の若い人たちに話す機会を与えていただいたことをうれしく思います。

まず自己紹介をします。氏名は大越和郎(おおこしかずお) 1940年生まれで今年69歳になります。

私が生まれた年、日本が中国との戦争開始から9年、前年に母方の伯父は中国で戦死しました。そして翌年には太平洋戦争が開始されます。

戦争体験最後の世代ということになります。

被爆当時の年齢は5歳、爆心地から約14kmの村で広範囲に降った「黒い雨」にあいました。

今年、6月から広島県被団協の事務局長をつとめさせていただいています。

被爆者とは

「原子爆弾被爆者援護法」という法律で被爆者へ「被爆者健康手帳」を交付していますが、被爆の状況により4つの区別があります。

1号は直接被爆者、原爆投下時に爆心地から1定の地域に居たもの。2号は入市被爆者、原爆投下から2週間以内に一定の地域に入ったもの。3号は被災者の救護等により「身体に放射能の影響を受けるような事情の下にあったもの」。4号は1号から3号までの胎内にいたものとなっており、私の場合は3号被爆です。

この法律に「被爆者」とは「被爆者健康手帳の交付を受けた者」ということになっていることから、「生存している被爆者は24万人」などと「手帳」所持者の数だけが言われることがあります。これは正しくないと考えます。

なぜなら原爆投下時とその後短時間で死亡した人や、手帳交付の制度の発足以前に死亡した人は手帳を保持していませんが、勿論被爆者です。

被爆後に故国の朝鮮半島に帰国し、手帳のない外国人の被爆者もいます。

被爆していても「手帳」の交付のための証言などが得られず、交付を受けられぬ人が現在も少なくありません。被爆者の正確な数はわからないのが実態です。その年のうちに広島で亡くなった人の数を14万人±1万人とされるなど、不正確なものです。氏名の判明した死者は毎年、平和公園内の「平和都市記念碑」にその名簿が収められますが、いまだに死亡したと思われるのに戸籍上は生存しているとされている人、氏名が判明しても遺骨の引き取り手のない死者が820名も残されています。

「人が人として扱われない」状況をもたらしたのが原爆の被害です。

これまでも皆さんは証言を聞き、体験記を読まれたことがあると思います。

被爆者の数だけ体験はあります。残された証言や体験記は膨大ですが、それはその一部です。

想像力を最大限に使い、原爆被害の実態を理解していただきたいと思います。

私自身は、爆心地から遠距離の地での被爆です。原爆

投下直後・爆心地周辺の状況は直接見聞していません。その模様は「別紙」の峠三吉の詩にその一端が描写されています。読んで想像してください。

爆心地周辺の被害は悲惨きわまるものであったことはいうまでもありません。

同時に私は体験から原爆被害がいかに広範囲にわたり、64年経った今日まで長期間続き、影響は次世代にも及ぶものであるかということをお話したいと思います。この事実を知っていただきたいと思います。

広島原爆投下から9年目のビキニ水爆実験では爆心地から100km以上も離れていた場所で被爆した漁船の船員が被爆後半年たって死亡しています。チェルノブイリ原発事故では、その影響は数百キロの範囲に及んでいます。核兵器開発による世界各地の被害の深刻な実態の広がりはいまだに明らかにされていません。

私の体験

当時、家には父母と2人の姉、2人の妹、疎開して来た母方の祖父母といとこの10人が同居していました。

長女の姉は女学校3年生で市内の親戚の家から通学していました。当時は女学生も労働力として工場で働かされ、その日は伯父の引越しの手伝いのため休んでいて爆心地から2kmで被爆しました。

地元の小学校教諭の父は長女と兄(伯父)の安否確認のため入市し、被爆しました。

母と村の学校に通学していた2人の姉、私と2人の妹、疎開していた母方の祖父母、縁故疎開していたところが「黒い雨」にあいました。

伯父は建物疎開に動員されて被爆し、投下の翌日に亡くなりました。その妻と長女も8月中に死亡し、一家の柱を失った子どもたちは親戚に引き取られて一家離散、苦難な戦後を送りました。

8月6日、父と姉は登校していました。私は妹と栄養補給のためカエル採りから帰宅し、足を洗い部屋に入ろうとしていました。

異様なサーチライトのように閃光がサーッと走りまわりました。それは暗い部屋の中のちゃぶ台の下のゴミまでがハッキリ見えました。

母は末っ子の妹を抱いて家の中を、私と妹は家の周辺を何が起きたか、見回りました。

何も分からぬまま縁側近くに帰ったとたんドーンと地響きを伴う大音響が響きました。ビックリした2人は裸足のまま部屋に入り、母の腰にしがみつきました。同時に突風が吹き、障子の幾枚かがパタパタと倒れました。

何が起こったのか分からぬまま、ウロウロしていたとき、外から祖父の「あれを見てみい...」という大声がしました。指差した山の上を見ると、真っ白い入道雲のようなものがモクモク上っていました。

その頃になると付近の人も家を飛び出し、何が起こったのか、不安な面持ちで話し合いながら空を眺めていました。

どれくらいの時間がたったか記憶がありませんが、真っ青に晴れ上がっていた空が崩れて曇り始め、空から色々なものが降っていました。

新聞の切れ端やハガキや手紙、屋根のソギ・ボロ切

れ・トタン板の切れ端、畳の切れ端、原型をとどめず炭になったものが次々に降ってきました。

危険な物ではないかと、さわるな、さわるなと火箸を持って集め野外の便所などに捨てました。

焼け焦げた八ガキに書かれた宛名などから被害を被った町の名がわかりました。それで大変広い範囲の被害であることが話し合われました。

しばらくすると雨が降りだしました。やがて「ゲリラ豪雨」のような強い雨となり、小川の水かさがあつという間に上昇し、真っ黒い流れになっていきました。

後でその水が入った小さな池にいた「はや」の数匹が腹を裏にして死んでいました。

あくる朝、雨を受けた朝顔の葉がしおれて変色し、その一部ははがれ落ちました。

午後になると、野道を徒歩や馬車、荷車に乗って被災者が避難してきました。

それらの人の様子は資料館に展示してある髪の毛が逆立ち、皮膚のただれた人など大変な状況でした。中には力尽きて道傍に座り込む人もあり、それらを付近の人たちが避難所に荷車に乗せて運び込みました。

この状況について「広島戦災誌」は次のように描いています。「被爆当日の午前十一時頃から、無惨な姿の避難者が続々と村内に入って来た。みんな、頭、顔、背中・腹・足などに火傷、あるいは負傷しており、トボトボと今にもぶっ倒れそうになりながら、徒歩でたどりついた。中には、自転車に乗って来た者もあったが、いずれも命からがらの状態で、コモを身体に巻いていたり、布の切れ端で前を隠したりしている人が多く、裸体に近い姿であった」

その日から、火葬場からは毎日煙が立ちのぼり続けました。戦災誌では「366名を4ヶ所の寺院、民家、学校などに収容、施設を閉鎖する9月10日までに288名が死亡し、埋葬火葬した」と記録されています。

その日、父方の祖母は爆心地から2kmで被爆しながら、額にわずかの傷を負っただけで元気に歩いて到着し、みんなで無事を喜びました。ところが翌日から高熱を発生してアツという間に亡くなりました。

父は姉と伯父などの安否の確認のために市内に入りました。翌日、2人は疲れきって帰宅し、伯父が重症を負ったこと、市内の被害の模様と帰り道の路傍に傷つき倒れて、多くの人が苦しんでいたことを家族に報告しました。

その年、村には2回にわたり市内の皆実小学校(爆心地が2・2km)の3年生から6年生までの児童約300人が引率の先生10人とともに集団疎開していました。

父母たちの住む街への原爆投下と被害の発生です。父母の安否は児童の最大の関心事です。直後から引率の先生と父たち地元の教師が児童の父母の安否確認のために連日市内に入りました。

先生たちは児童を集め、調査の結果を「君のお父さん、お母さんは亡くなった」「さんのお母さん、お父さんは怪我をして収容されている」「さんのお母さんは不明」など判明した父母の消息を報告しました。

この修羅場となった「残酷」な報告をした後、帰宅した父の鎮痛な顔は今でも覚えています。

後で父の日記からその日時は8月11日であることが

わかりました。

それら両親を亡くした子どもたちがどんな戦後を送ったのでしょうか。被爆50年後、両親を亡くしたその中の一人が村を訪ねて来た模様がテレビで放映されました。

さまざまな原爆被害

原爆被害は、爆心地の温度が3千から4千度にもなった熱線による被害、瞬間時速440mにもなった爆発にともなう爆風の被害、それと放射線被害があります。

原爆被害の正確な実態、その全体像は今も不明の部分が少なくありません。

私の妹は8月20日に高熱を発生して2歳の誕生日を迎えることなく幼い命を落としました。

医者診断は「はしか」と栄養失調となっていますが、しかし、「はしか」が蔓延した兆候はなく、短時間に高熱と発疹を発生して亡くなった姿から、今、原爆の影響を否定できない思いがします。

黒い雨に遭った人たちの中にも様々な病気に倒れる人があり、不安が広がりました。

私自身は、当時の栄養状態の悪さや生活環境の悪化のためか病気がちで、しばしば学校を休みました。農作業の手伝いや夏の朝礼のさなかに気を失って倒れたこともありました。

そうした中、周辺の児童3人が白血病で亡くなっています。このようなことから、小学生の間は何時も不安にさいなまれていました。

幸い中学生になった時から体質の変化からか、今日まで大きな病気もせずこうして皆さんの前で話しています。

しかし、被爆の後50年以上経過しても、白血病やガンで倒れる人が少なくありません。

私の浴びた「黒い雨」は原爆投下により舞い上がった放射能を帯びたススやチリが急激な上昇気流にのって上空に運ばれ水蒸気を多く含んだ空中で核となり雨を造ったと説明されています。

法律は、その雨の降ったのはきれいな楕円形の地域とされています。

しかし、実際はそのようなきれいな楕円形の地域の外で広範囲に降雨があったという証言が多くあります。気象学者も原爆投下という異常な条件の下でもこのような形で降雨があるとは理論的にありえないと言います。

この地域指定は終戦直後の不十分な調査によるものでありながら、いまだに改められていません。これらの指定外地域で降雨を受けて死亡し、いまでも健康被害で苦しんでいる人たちが粘り強く地域指定の拡大・変更を求め運動を続けていることを知っていただきたいと思えます。

原爆被害の実態を明らかにする闘い

いま、原爆症認定訴訟が闘われています。その闘いで政府が原爆被害を狭め、極力小さいものにしてきた政策が司法の指弾を受けました。

当然にも制度の改善が求められますが、政府は司法の

判断に抵抗し、立法府である国会の意思を踏みにじって抵抗を続けています。

現在の「被爆者援護法」は、成立から幾度かの改正がされましたが、制定の精神は被爆した人の実態にそって冒頭に説明したように「原子爆弾の放射能の影響」があったと思われる人の救済をめざしていました。これは立法にたずさわった当時の職員の証言でも明らかにされています。

しかし、1975年の天皇の「原爆投下はやむをえなかった」発言や、原爆被害は「戦争で生じた国民の被害はひとしく受忍すべきもの」という「原爆被爆者対策基本問題懇談会」答申、放射線被害を初期放射線に狭め、その放射線量だけで被害を認定する「原因確率論」に固執してきました。

このように、被爆者救援という精神が狭められ後退させられてきました。

そのため、被爆者でその病気の原因が放射線の影響にあると認められる者は1%にも満たないという異常な事態が続きました。

自分の病気は原爆が原因であると認めるべきだという被爆者の必死の訴えと、それを支援する弁護士、学者、支援者の力によって、広範で深刻、長期間にわたる原爆被害の実態が明らかにされてきました。

その一つに「内部被曝」があります。「内部被曝」とは、放射線を長期に放射し続ける微粒子を空気や食物と一緒に体内に取り込んだことにより、その微粒子が染色体や細胞を傷つけ続けるというメカニズムであることを学者が解明しました。最近それを実証する実験結果が発表されました。

人類が核兵器を手にして以後、繰り返された核保有国による数千回もの核実験により、大気中に膨大な放射性物質が放出し続けられました。

そのため過去は希有の病気と言われた子どものガンが核兵器開発の後に異常な数で拡大しているという研究があります。

私の妹の3男は小学校入学を前にしてガンで亡くなりました。このことを知り、理不尽に幼い命を奪われた甥の死にも、核兵器実験や原爆の影響があったのではと考えてしまいます。

原水爆禁止運動の発展

いま核兵器大国のアメリカ大統領が「核兵器をなくす」ことを国家の目標にし、原爆を投下した国として廃絶への道義的責任を語り、そのとりくみへの各国政府と人々の協力を呼びかけるまでになりました。

しかし、核兵器廃絶運動はここに至るまでに長く苦難に満ちた闘いがありました。

その最初は、原爆を投下したアメリカの原爆と被害の実態を語ることも、広げることも禁止する言論弾圧と被害の隠蔽の攻撃です。

「ピカドン」という言葉があります。原爆投下の閃光の後、数刻の後に発した大爆音の現象を言った言葉です。同時に米軍占領で「原子爆弾」という言葉さえ禁止され、「原爆で死んだ」ということも言えず「ピカで死んだ」と言わざるをえなかったのです。

平和公園内に当時建立された多くの「記念碑」には「原爆」の文字がまったく刻まれていないという痕跡を残しています。

原爆被害の悲惨な状況を撮影した写真の公開も禁止されていました。小学生の私たちの教室で「こりゃー、他人に見せちゃーいけないのよ」と密かに被害の実態を写した数枚の写真が回覧されたことを記憶しています。どのように禁止されても、人々は抵抗してその実態を広める努力を続けてきたのです。

この状態が変わり、多くの日本人が原爆被害の実態を知ることができるようになったのは、アメリカの占領が終わってからです。

1952年8月、『アサヒグラフ』という雑誌に「原爆被害の初公開」と被害の実態を映した写真が掲載されました。それは即日完売し、増刷を重ね70万部が発行されました。原爆被害の実態についてやっと日本で知られることになりました。

当時高校生であった作家の井上ひさしさんは、それを見た衝撃が、原爆被害の女性を描いた「父と暮せば」などで原爆を取り上げる原点になったといえます。

1951年に『原爆の子』『広島少年少女のうたえ』という被爆した児童・生徒の手記集が発刊されました。この手記を残している最低年齢は4歳です。中学校の同級生の数人が手記を残しています。このように徐々に原爆被害の実態が国民の知るところとなりました。

この間、原爆にあったことも口にできず、暮らし、こころを破壊された被爆者の苦難は放置され続けてきました。

有名な「原爆の子」の像の建設の発端は、被爆後10年たって白血病で倒れた佐々木禎子さんの死があります。

あの運動のエネルギーとは、佐々木さんだけでなく周辺で少なくない子どもが佐々木さんと同じように倒れていった事例を多く体験したことにあると思います。

末端で参加した私をふくめ「原爆の子」の像建設に多くの児童・生徒が参加、1954年のピキニ水爆実験被害により核兵器の恐怖を人々が知り、核兵器廃絶の運動の高まりの中で「原水爆禁止世界大会」が開かれ、翌年には日本被団協が結成されるという運動の発展の後押しがありました。像の完成は1958年5月です。

こうした運動の発展の中で被爆者は初めて被害の実態を語り「ふたたび被爆者をつくらない」「核兵器をなくせ」と叫び始めました。「生きてきてよかった」の言葉が生まれたのもこの時期です。

原水爆禁止運動はこれらを背景に大きな広がりを持ち、原爆反対の運動は市町村ごとに取り組みられました。

しかしその運動は当然にも核大国であるアメリカの政策と衝突することになります。

原水爆禁止運動が安保条約反対の声を上げ始めたため、自民党は、自治体の財政的支援も打ち切り、この運動から手を引きました。

それ以後、核兵器保有大国の核兵器の保有こそ平和をもたらすという「核抑止論」が世界を覆うようになりました。こうした核兵器廃絶運動への数々の障害と困難を乗り越えて粘り強く運動が続けられてきました。

若い人たちへの期待と希望

国連が結成されて「国連決議」は先の北朝鮮の核実験の対応で出されたものなど現在1800を超えています。

その決議の第1号は「原子兵器および大量破壊兵器に適用できるその他すべての主要兵器の軍備を廃絶すること」とする核兵器廃絶の宣言でした。

さらに日本国憲法9条の原点は、誤った戦争への反省、戦争の違法化、核兵器の出現が、人間とその文明の破壊につながるものであり、人間を取り戻すことにあります。そして「戦争の放棄」と「戦力の不保持」という崇高な目標を掲げました。

もし、国連決議第1号と憲法9条の通りの政治が世界と日本で行われていれば、核兵器の廃絶は実現しているはずでした。

残念ながら、その後の世界は、アメリカとソ連が核兵器開発競争を続け、それに多くの国が追従するなかで核兵器は拡散しました。

日本でも戦力を持たないと決めたにもかかわらず、自衛隊という戦力が作られました。世界に率先して核兵器廃絶をめざさなくてはならない日本が「核の傘」というアメリカの核戦略の下に置かれています。

しかし、原爆投下以後、幾多の困難を乗り越えて進められた被爆者の「ふたたび被爆者をつくるな」「核兵器の廃絶」という訴えがやっと世界の政治に届き世界を動かし始めています。

オバマ大統領は「核兵器をなくすとくみ」への世界各国政府、人民の協力を呼びかけています。この呼びかけに是非応えていきたいと思います。

最後に、21世紀の先まで生きる若い皆さんに訴えたいことがあります。

日本では総選挙が間近です。争点のひとつに世界に誇る憲法9条を守るかどうかがあります。

核兵器廃絶の闘いと、憲法9条を守るたたかいは深く結びついています。それは、核兵器の出現で「文明と核兵器は両立しない」「核兵器により文明を破壊するのか、人間が核兵器をなくし文明を守るのか」。この精神が、核兵器の出現以前に作られた国連憲章を超えて日本国憲法に取り入れられたのです。

いま、田母神元幕僚長など、日本の「あの戦争は誤りだった」と言うことは「日本を悪い国にすること」。戦争は正しかったとするのが「日本を良い国にすること」と戦争を正当化する発言と動きが強められています。

良い国か、悪い国かは、戦争を正しかったか誤っていたかで判定できるものではありません。

誤った戦争を真剣で真摯に反省した憲法9条を活かし、守ることこそ、日本が世界から尊敬され「良い国」という評価を得ることになります。

また彼は、広島を繰り返さないためには「日本は核兵器をもつべき」など、とんでもないことを公言しています。

「過去に眼を向けない者は、未来に対して盲目」といいます。

こんな放言は多数派ではないものの、決して軽視できません。反撃をしなければ、それが誤った方向に政治を

動かします。

これから広島・長崎と続く世界大会を成功させ、そこで決められる方向で参加者の皆さんが努力を続けられることを期待します。

頑張りましょう。ありがとうございました。